現地理解教育の充実をはかる学校経営

── 現地校との合同授業を通して ──

前高雄日本人学校　校長
太宰府市立太宰府西中学校　校長　矢　木　信　男

キーワード：学校経営，現地理解教育，合同授業，中国語会話，キャリア教育

１．はじめに

(1) 概要

高雄市は台湾第２の工業都市である。76歳以上の方々は日本語を話すことができ親日的である。外国にいながらにして懐かしい日本を思い出すような地域である。本校の児童生徒数は183名で，子ども達は素直で家族的な雰囲気で仲がよい。教師集団は協調性に富み，保護者は学校を信頼し支援してくれている。PTA活動も活発で積極的に学校に協力してくれる。本校はあいさつ運動に力を入れ「世界一あいさつのできる学校」をスローガンにして取り組んでいる。

（高雄日本人学校のあいさつ垂れ幕）

(2) 現状と課題

赴任して１年目（平成18年度），現地校との交流を参観しながら，教師達の現地校交流に対する取組に物足りなさを感じた。教師は全員，現地理解教育をしたいという強い意欲を持ちながら，単なるイベント的交流に終始しているように思われた。教師達の願いが授業実践で生かせ，子ども達が台湾の子ども達と心から楽しみ，多くの友達をつくり異文化理解ができる交流方法はないか，を最大の課題ととらえた。そこで課題解決の方策として一つは今まで小学校１校（高雄師範大学附属國民小學），中学校１校（鹽埕國民中學）で交流活動が実施されてきたが，交流校を増やせば両国の文化のちがいを知り相互の異文化理解を深めることができるのではないかと考えた。次に中国語会話の授業を小１から中３まで週２時間実施しているが，その効果が見えない。これを改善すれば交流会がさらに活発化し友達づくりが可能になってくるのではないかと考えた。さらに，教師の現地教材化をはかり現地校と合同授業を実施することで児童生徒の異文化理解がより深められると考えた。

(3) 経営方針と重点目標の設定

平成19年度の経営方針には「教職員は積極的に『現地から学ぶ』姿勢をもち，異文化理解を深め，多文化（クロスカルチャー）社会への参画意識を高める」を掲げた。そのために教師の合同授業，現地校の教員との研究授業を通して現地校の指導と評価の異質性と同質性をとらえ異文化理解，現地理解教育を推進するとした。次に教育重点目標には「現状と課題」から３つの課題（現地校との交流回数の増加，効果的な中国語会話の活用，合同授業の実施）の解決のため「現地校交流会を通して自他共に認め合える仲間意識を高める」を重点目標の一つとして設定した。そのために組織マネジメントにより現地校と交流できる学校の開拓をし，和太鼓の導入，さらにキャリア教育の推進やPTA祭りなどを通して可能であると考えた。

２．特色ある教育活動

(1) 現地校との合同授業の実施

① 合同授業実施校

○ 平成18年度

小学校１校－高雄師範大学附属國民小學（対象学年：各学年部毎）

中学校１校－鹽埕國民中學（対象学年：中学部１年生と２年生）

○ 平成19年度

小学校４校－高雄師範大学附属國民小學（対象学年：各学年部毎と小学１年生から小学６年生までの合同運動会）

信義國民小學との合同授業（対象学年：小学１，２年生の音楽授業）

七賢國民小學との合同授業（対象学年：小学３，４年生の図工授業）

福東國民小學との合同授業（対象学年：小学５，６年生の英会話授業）

中学校２校－鹽埕國民中學との合同授業（対象学年：中学部１年生と２年生，社会，理科，英語，美術）

桃源國民中學（対象学年：中学部１年生～３年生，国語，数学，社会，理科，音楽）

② 合同授業の実施

○ 小学部は今まで高雄師範大学附属國民小學のみの交流から信義國民小學，七賢國民小學，福東國民小學の３校を含めて全４校と合同授業を中心に実施していった。特に高雄師範大学附属國民小學とは初めて合同運動会を実施することができた。相手校の全教師が「開会の言葉」「閉会の言葉」は必要ないと主張し，文化の違いを痛感した。また，バトンリレーの経験がないので，５，６年の児童は相手校の児童にしっかりと教えながら友達づくりをおこなった。

○ 中学部では鹽埕國民中學の１校から桃源國民中學とも交流し２校とした。ねらいは現地校との合同授業，台湾の文化行事を通して生徒に異文化を理解させること，および友たちづくりにあった。桃源國中學との交流では，ブヌン族との踊りと生活を学習し，それを学習発表会で再現することで，奇習の内容を理解することができ，異文化理解を深めた。

③ 台湾の教師との研究授業の実現

○ 高雄市内の小学校，中学校の実技教科（美術，音楽）を中心とする教師・18名が本校の美術担当の授業「水墨画」を通して研究を深めた。授業反省会で現地校の教師が高く評価したのは，基礎基本の定着として毎時間実施している「クロッキー」の実践，生徒（中学部２年）の授業態度であった。水墨画の指導では現地校の教師から指導してもらい相互の指導観において有効な指導法を研修することができた。特に本校では「基礎・基本の確かな定着」を研究課題として取り組んでいるため有意義な共同研修であった。

（クロッキーの写生）

(2) 効果的な中国語会話の活用

① 中国語校内検定，台北師範大学認定検定の導入

○ 台北師範大学認定の外国人児童生徒の中国語検定を導入して初級，中級のテストを実施した。初級は全員（50名），中級は96％（46名）が合格した。この検定を基準に校内検定プロジェクトチーム（中国語常任講師３名を中心）をつくり，初級，中級，上級のテスト問題を作成し，全児童生徒に実施した。これは現地校交流に大きな成果をもたらした。また職場体験学習や校外学習にも役立った。

② 中国語スピーチコンテスト

○ 小学部３年，４年生を対象に中国語のスピーチコンテストを実施した。ねらいは，中国語会話の力を高め，

語彙を増やし，コミュニケーション能力を高めることである。内容は小学3，4年生のA，Bクラス（初級クラス）の児童には基本的な会話内容を中心に暗唱させ，C，Dクラス（上級，中級クラス）には現地校の小学3年生の国語の教科書の内容を基に暗唱させて1分間でスピーチさせた。これは大変に効果があり，95％の児童が教科プリントを見ずに暗唱できた。児童達も自分の暗唱力の高さに驚いていた。これは子どもたちに中国語会話への自信をつけた。

(3) 太鼓演奏の実現

○　赴任1年目に鹽埕國民中學との交流会でオープニングに「台湾の太鼓演奏と演舞」を鑑賞させてもらった。これは生徒，教師にショックを与えた。本校には日本文化を象徴する音楽が何もない。和太鼓演奏は日本文化の象徴であると考え，早急に日本から太鼓を取り寄せ，全教職員で指導体制を作り練習した。その結果すべての教師が太鼓演奏ができ，保護者の前で披露できるようになり教師集団の結束力も高まった。半年後には児童生徒の指導にあたることができるまでになった。交流できた小，中学校では児童生徒による太鼓演奏ができるようになり，両文化に対する関心を高めた。

（歓迎の和太鼓演奏）

(4) キャリア教育

○　中学部では海外の職場体験学習が親の職業を理解させる好機であるととらえ，また，現地で活躍する日本人を理解させる学習の場としても効果があると考えた。講師として台湾で活躍している日本人のホテルマンを招聘し台湾における勤労観，職業観について聞いた。それは日本人の労働観と台湾人の労働観との比較文化論でもあった。また，半日ではあるが「マナー研修」で日系デパートの社員（台湾人）より挨拶マナーの実技指導を受け，接客対応の方法を習得した。またそのためには特に中国語会話に重点をおき指導していった。生徒自身の職業に対する意識が高揚し，中国語会話の重要性を認識した。11月22日の職場体験学習当日はホテル2社，飲食店2社，図書館，幼稚園2事業所で54名の生徒が体験学習をした。

（礼のマナー研修会）

(5) PTA祭り

○　PTA祭りは毎年11月第3土曜日に開催している。学校と企業と地域が結びつく 唯一の開かれた学校の形態である。特に日本人学校では地域の方々の結びつきを強めるためにはこの行事は大変に効果がある。地域の方々を招き，企業から製品等をいただき，バザーを通し日本文化の紹介を親，教師，子供たちで進めていった。また，ボランティアとして文藻外語学院大学日本語科の学生20人，義守大学日本語科の学生12人が日本文化を学びたいとのことでサポートしてもらい，本校の中学部生徒との交流も兼ねて展開した。

3．成果と課題

(1) 成果

①　現地理解教育の成果を評価する方法は児童生徒が交流会を通して「何人の友人をつくったか」ではかることにし3回（5月，9月，12月）の実態調査をした。児童生徒の実態から交流を通し5％伸びれば目標を達成したことになると全職員で実践してきた。第1回調査（5月）「友人は3人以上できた」の項目では小学部52％，

中学部53％であった。それが小学部交流校４校，中学部交流校２校での交流の結果では小学部が51％，中学部が58％であった。結果として小学部は目標を達成できず，中学部は達成できた。小学部が目標を達成できなかった原因は交流時間の配分にあった。合同授業のみの時間活用で遊びや自由時間を取ってなかったことである。児童の感想文にも「友達と話す時間がなかった」と多々記されていた。それに対し中学部は昼食後１時間の交流タイム，自由時間を設定し相互に名刺交換などさせることが成果として表れたと分析した。

② 中国語学習への関心が高まった。中国語授業に関心をもてない児童生徒が多かったのは本校指定のテキストだけを学習するという指導内容等に課題があった。しかし，交流会を通し自分から声をかけ，自己紹介をし，話題を提供することで相互理解ができると意識するなかで，中国語会話の必要性を高めた。交流場面を想定した会話文を暗唱し，友達づくりの場面設定による授業展開は学習効果を高めた。また，校内検定試験を初級，中級，上級で実施し，一人一人の中国語学習の課題を明確にしたことは児童生徒はもちろん保護者への中国語理解を深めた。交流活動で中国語会話が役に立ったと多くの児童生徒が感想文に書いていた。

③ 合同授業は教師にとって有意義な現地理解教育となった。特に小学部では12月の高雄師範大学附属國民小學との合同運動会の実施のために２月から計10回の打合せをし，学校文化の違いを認識した。例えば開閉会式の有無から始まり「なぜ準備体操が必要か」，演技では「応援合戦」とは何か，「大玉転がしは台湾の学校にはない」などの競技，演技内容にいたるまで，教育文化の違いを学んだ。それらが子どもたちへの興味関心を高め，教師間，児童間の異文化理解に結びついた。

④ 現地校交流で，日本文化の技の習得と演奏で和太鼓を日本から取り寄せ，全教師が週１回（水曜日放課後）20分間練習したことは，太鼓演奏の技の習得のみならず，日本文化そのものを学ぶことになった。結果的に教師，児童生徒に大きな成果をもたらした。勿論，現地校の児童生徒，教職員は感動し，日本文化に高い関心を示した。また，教材として小学部５，６年生の英会話交流には大きな効果をもたらした。

(2) 課題

① 合同授業における教師の中国語会話の理解度である。教師の語学力を如何に早い時期に高めるかが合同授業の成否にかかわってくる。現状は語学学校に週１，２時間通っている情況であるが，これをもっと学校内で組織的に効率的にできないかと考える。

② 多忙さを招いたことである。保護者懇談会で交流行事，校外学習等が多く，余裕がないという意見が出された。無から有を創造していく段階では止む終えないと説明した。来年度は本年度の課題を解決する方策を考え「量の課題」から「質の課題」に移行させていきたい。

４．おわりに

今回，現地理解教育の充実をめざして現地校との合同授業を実践してきた。経営の観点から，教師の「現地の学校を知りたい」という意欲，情熱等を組織的な指導体制を構築しシステム化することで成果をあげることができた。合同授業はできないと思っていた教員達が進んで中国語で説明し授業を展開している姿を見たとき，新しい学校文化が誕生したと思った。それが子ども達に異文化理解を深める最良の方法であることを体感した。教師達は子ども達が多文化社会で共生していくために何が必要かを指導を通して習得した。「ちがい」を理解し，尊重する姿勢がお互いの絆を強めることを身をもって学んでいった。「イベント交流から一歩脱皮できた」と教師達が語った表現はそれを象徴していた。最後に「『最初，積極的でなかったが気づいてみたら自分が楽しんでいた』という感想を述べた生徒がいた。授業者である私も全く同じ気持ちであった」とある教員は回想していた。この「楽しむこと」こそ合同授業を継続させていく最も大切な姿勢であろう。